

はるか半世紀以上のことを振り返って、言いたいことは山ほどある。それはお互い様で、みんな同じ思いと考えているし、すでに「ソ連における日本人捕虜の生活体験を記録する会」の十冊にも及ぶ記録も残されている。個人のもの、集団のもの、と多様に及んで残されている。

## シベリアの思い出

東京都 石川 寛 治

一 昭和二十(一九四五)年一月十日東部二四部隊初年兵として入隊。大雪で遅れる者あり編制完了。一月十八日夜行列車で下関經由釜山經由京城(ソウル)―会寧部隊に行く。

二 歩兵第七五連隊(奉二一一五三部隊)会寧。

三 昭和二十年四月末日初年兵教育終わり五月連隊一同は山洞屯村。北朝鮮豆満江側の陣地構築に入る。場所は洞頓村前方の山は満州の銃砲隊

の陣地構築が行われていた。

四 昭和二十年八月九日阿部軍曹ほか二人と部隊とトモンの衛生大隊に行き、戦時の材料受領に行ったが不足で何も無いので帰隊した。この日、山洞頓村までの地方人の移動が次から次と来て、翌日十日トモンの豆満湖の河原で武装解除を受けた。

五 トモンから夜行で延吉(間東)まで行軍で歩き途中の残骸は見るに忍びないものであった。

六 延吉を出発、千人単位で部隊は徒歩でロシアのソフガニーの山裾に集結、列車で奥地に連れていかれた。列車をおりるとトラックに乗せられて三〇四收容所に入った。翌日三〇一收容所に行った。この時は建物は少なかつた。私は医務室の阿部班長と少したって入った。このとき斉藤軍医、寺岡曹長、阿部軍曹、佐藤、神蔵、石川の衛生兵でありました。

七 昭和二十二年八月医務室より阿部班長とバーニヤ(浴室)に移る。

八 昭和二十三年三月ゴーリンで青年行動隊で一月の勉強にいった。

九 青年行動隊から帰り三〇一会の木村小隊に移り鉄道作業に入った。

十 昭和二十三年十一月二十五日ナホトカ港より舞鶴港に帰る。

#### 注・抑留期間の医務室の概況

(イ) 自動車小隊の赤松さん、タンク爆発し死亡。(ロ) 小野塚上等兵病気で死亡、肺炎とのこと。(ハ) 斉藤軍医、収容所内での腹部手術で死亡。(ニ) フロローワ、ポリナヤ、ザパローナ女医さんであった。以上が野村医務室での勤務であった。

#### シベリアの思い出

東京都 木村 高次

昭和二十(一九四五)年九月三日牡丹江で終戦。三〇一に収容された。

三〇一分所木村小隊のできるまでについて。

入所以来縫製工として約二年程度いましたが、当時工場の責任者でペトロの妻でしたアーニヤに私は何かと可愛がられました。それを疎まれ大喧嘩になり、あげくの果てに解雇されました。翌日裏山で路盤の基になる穴掘りの作業に行かされました。山は岩盤で大変でした。私の受け持った場所でのノルマは五十センチでした。一メートル四方の所が幸いに砂地の楽な所なので二メートル程度を三時間くらいで掘り終わった。普通二十〜三十センチ掘るのがやっとなので、後は穴の中で眠っているとロスケが来て起こされて事情を話す